

修士論文（要旨）  
2018年1月

福祉型障害児入所施設における知的障害のある中学生を対象とした  
小集団 SST の有効性の検討

指導 小関 俊祐 先生

心理学研究科  
臨床心理学専攻  
216J4004  
尾曲 敏三

Master's Thesis(Abstract)

January 2018

The Effectiveness of Small Group SST (Social Skills Training) for Junior High School Students with Intellectual Disabilities at a Welfare Facility

Toshimi Omagari

216J4004

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Shunsuke Koseki

## 目次

第1章 問題と目的.....	2
第2章 研究1：日本における知的障害のある児童生徒を対象とした対人コミュニケーション支援に関する動向.....	4
2.1 本研究の目的.....	4
2.2 方法.....	4
2.3 結果.....	7
2.4 考察.....	7
2.4.1 集団随伴性による実践の効果と課題.....	7
2.4.2 SSTによる実践の効果と課題.....	7
2.4.3 今後の対人コミュニケーション支援への示唆.....	8
2.4.4 本研究の課題と発展性.....	10
第3章 研究2：福祉型障害児入所施設における知的障害のある中学生を対象とした小集団SSTの有効性の検討.....	11
3.1 福祉型障害児入所施設の背景と問題の所在.....	11
3.2 知的障害のある対象生徒の評価.....	12
3.3 本研究の目的と意義.....	12
3.4 方法.....	13
3.4.1 対象生徒が入所している施設の特徴.....	13
3.4.2 対象生徒.....	13
3.4.3 対象生徒のプロフィール.....	13
3.4.4 実施時期.....	14
3.4.5 介入内容の説明とターゲットスキルの選定.....	15
3.4.6 SSTに関する手続き.....	16
3.4.7 SSTプログラムの構成.....	16
3.5 効果の測定.....	17
3.6 結果.....	19
3.6.1 尺度得点に基づく結果.....	21
3.6.2 モニタリング調査に基づく結果.....	27
3.7 考察.....	29
3.7.1 SST実践の効果.....	29
3.7.2 モニタリング調査に基づく介入効果.....	31
3.7.3 本研究の限界点.....	32
3.7.4 総合考察.....	32

謝辞

参考文献

資料

## 第1章 問題と目的

日常生活においては、良好な対人関係の形成・維持には言語的コミュニケーションだけでなく、表情や態度などの非言語的コミュニケーションも重要な役割を果たしている。向後・望月・越川（2003）は、知的障害者は呈示条件を問わず、健常者よりも感情の読み取りが困難であること、および快と不快の混同が健常者と比較して高い確率で認められることを報告している。そのため知的障害児童生徒も同様に、相手から発信された言語および非言語での情報を理解し、的確な対応をとることが難しく、円滑に対人関係を維持するソーシャルスキルが不足していると考えられる。藤枝（2012）は、ソーシャルスキルとは、「仲間と適切な対人関係を形成し、維持、修復していくうえで必要な技能であり、認知と行動の両方から構成されている」と定義しており、この技能は、学習によって獲得することが可能なものであると指摘している。以上のことから、知的障害児童生徒が円滑なソーシャルスキルを身につけることが可能になれば、地域社会の中で積極的に活動することが可能になると期待される。また、これを実現するためには、適切な支援方略の確立が求められる。

そこで、本修士論文においては、知的障害のある児童生徒を対象とした対人コミュニケーションスキル支援方略を実践し、その有効性について検討する。

## 第2章 研究1：日本における知的障害のある児童生徒を対象とした対人コミュニケーション支援に関する動向

知的障害児童生徒を対象とした対人コミュニケーション支援方略の課題と改善点を提言することを目的として、日本における知的障害児童生徒を対象とした対人コミュニケーション支援に関する実践研究の過去15年間の展望を行った。その結果、1) プログラム実施中は、対象者の理解度と遂行度を確認しつつ機能的なフィードバックをすること、2) 標的行動は、対象者が日常生活で必要とするスキルを選定すること、3) 対象者の遂行スキルの理解度や言語能力などを把握した上で、プログラムの内容とセッション数を決定することなど6つの改善点とSSTで獲得した適応スキルの生起頻度が時間の経過に伴って減少するという課題が明らかになった。

## 第3章 研究2：福祉型障害児入所施設における知的障害のある中学生を対象とした小集団SSTの有効性の検討

本研究は、福祉型障害児入所施設における知的障害のある中学生を対象として小集団SSTを実施し、対人コミュニケーションスキルの獲得および円滑な対人関係を促進させる効果の有効性について検討することを目的とした。研究1で抽出された改善点と課題に基づき、SSTプログラムを作成し、小集団SSTを実施した。なお、本研究は桜美林大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（倫理申請番号16031）。

関東にあるA市内の公立中学校に通う知的障害のある中学1年生から3年生の生徒13名（SST群6名、対照群7名）を対象とした。SSTプログラムは、あいさつをターゲットスキルにして、コミュニケーションの基本的なスキルを身につけること、あいさつから得られる良いことに気づくことを目的とした。介入は、週に1回、1回20分程度、計3セッションで実施した。SSTの有効性を検討するために、質問紙として児童用社会的スキル尺度（嶋田，1998）、心理的ストレス反応尺度（嶋田，1998）を用いて、介入前、介入後、

フォローアップに調査した。さらに、SSTの結果を客観的に評価し、集団においてどのような相互作用が生み出されたかを検討するためにモニタリング調査表を用いた。なお、児童用社会的スキル尺度およびモニタリング調査は自己評価と他者評価で回答を求め、心理的ストレス反応尺度は自己評価で回答を求めた。しかしながら、対照群のデータを継続的に収集することができず、ほかのユニットへの般化を確認することができなかった。今後は、簡便な評価手続きを検討するとともに、参与観察などによって、研究協力者の負担に頼らないデータ収集方法を選択することが必要であると考えられる。そこで、分析方法は、対象生徒が少数のためノンパラメトリック検定である Friedman 検定を行った。また、モニタリング調査表からターゲットスキルの生起回数の推移を分析した。

その結果、自己評価の社会的スキル尺度の「攻撃行動」と心理的ストレス反応の「不機嫌・怒り」で有意差が見られた。また、担当スタッフ評価の「攻撃行動」で負の有意差が見られた。そのため、Wilcoxon の符号付き順位検定を行い、Bonferroni 法による調整された有意水準である  $p = .016$  を基準に有意差の検討を行ったが有意差は認められなかった。そこで、プログラムの効果量を検定するために、効果量  $r$  の算出を行った。その結果、自己評価では、社会的スキル尺度の「引っ込み思案行動」と「攻撃行動」で大程度の効果量が示された。心理的ストレス反応尺度では「不機嫌・怒り」「抑うつ・不安」で大程度の効果量が示された。また、モニタリング調査の結果から、自己評価でスキルの生起回数が増加していることが示された。

本プログラムは、自己評価として引っ込み思案行動と攻撃行動を低減させる介入の効果量を持つことが示唆された。また、不機嫌・怒りと抑うつ・不安感情を低減させる効果量を示したことで、引っ込み思案行動、攻撃行動のようなネガティブなイメージを持つ行動に対しては、対象生徒の認知的評価によって自己満足感や自己効力感が高まり、行動変容を促す一定の効果があったと考えられる。一方で、自己評価と他者評価で差異があることが示された。これは、対象生徒は、実際の行動ではなく自分のスキルの遂行に関する認知的評価を測定していると考えられることから自己評価と他者評価の間に差異が生じたと推測される。今後の課題としては、対象生徒の自分のスキルの遂行と、それによって生じた良い結果を結びつけ、随伴性認知を高めるためには、その行動が生じた機会を捉えて機能的なフィードバックすることである。つまり、「おはよう」を言ったときの心理的変数の変化について、内省を引き起こし、それに伴って生じる行動との関連性を強調することで、スキルが維持されやすくなるようにすることが必要であると考えられる。また、日常生活をおくる入所施設で SST を実施するという特徴を活かせるプログラムに進展させることである。入所施設は、かかわりの強い人から薄い人までいろんな人がいることが一つの特徴のため、家庭とも異なりさまざまなパフォーマンスの度合いが確認できるはずであった。しかし、本研究では、集団での相互作用を確認することができなかった。今後は、入所施設だからこそ集団の相互作用などが確認できるプログラムの構造を進展させる必要があると考えられる。さらに、「あいさつ」以外のスキルを継続的に扱う必要があると同時に、「あいさつ」をターゲットスキルとした場合の、他のスキルに対する般化効果についても検討することが重要であると考えられる。本研究では、小集団 SST の効果を客観的に実証するまでは至らなかったが、知的障害児童生徒が日常生活をおくっている入所施設で、小集団 SST を実験的に実施し、検証した意義は大きいと考えられる。

#### 参考文献

- 藤枝 静暁 (2012). 子どもを対象としたソーシャルスキル教育の実践研究 風間書房
- 向後 礼子・望月 葉子・越川 房子 (2003). 知的障害者における表情ならびに音声からの他者感情の識別について 特殊教育学研究, 40 (5) , 443-450.
- 嶋田 洋徳 (1998). 小中学生の心理的ストレスと学校不適應に関する研究 風間書房